

『雲介子関通全集』の再評価

梶原俊彰

〔抄録〕

『雲介子関通全集』が昭和十二年に完成されて以降、江戸中期の高僧である捨世派関通の研究は飛躍的に拡大、発展を遂げた。全集は多くの研究者たちに支持され、関通研究における原典の役割を担ってきた。しかし、本全集は全集とはいいながら未収録の著作などもあり、またその底本についても十分に吟味されていない

点もある。本論では、資料の成立背景やテキストの比較検証等から浮き彫りとなった本全集における問題点を指摘し、『雲介子関通全集』の再評価を試みるものである。

キーワード 関通、雲介子、関通全集、捨世派、山下現有

はじめに

江戸時代中期、浄土宗捨世派に関通（一六九六―一七七〇）という高僧がいた。浄土宗にあつて持戒念仏を貫徹した関通は、同時に民衆に対しても積極的な念仏勸化を行った。その中で、弟子や信徒らに自身の教学、教理をよりわかりやすく伝えるため、多くの著述をのこし布教活動に役立てた。『雲介子関通全集』（以降『関通全集』）は、関通がのこした多くの講説、法語、及び伝記を収録した、現行で唯一の全集である。

『関通全集』は全五巻から成り、収録される典籍は以下の通りである。^①

第一巻

『燧囊』 一巻

『燧囊俚語』 四巻

第二巻

『歸命本願鈔診註加俚語』 三巻

第三巻

『圓光大師御遺訓一枚起請文梗概聞書（一枚起請文梗概聞書）』 三

卷

『浄土要略鈔講録(附心行雜決)』二卷

『本願念佛勸化本義』一卷

『夢乃知識』三卷

『續夢乃知識』三卷

第四卷

『聞法十徳』一卷

『大慈悲勸戒利益章』一卷

『選擇本願念佛集玄談』一卷

『專念法語拔萃』一卷

『自制策^マ戒(自制誠策)』一卷

『客問安心編(客問安心編)』一卷

『修進記』一卷

『一向專修行者朝暮回向之事(廻向記)』一卷

『專修念佛者持戒討論』一卷

『後の世のつと』一卷

『臨終節要集録』一卷

『一向專修念佛の抄』一卷

『法の繪双紙(法の繪草紙)』三卷

『燧囊俚語托事辨』三卷

第五卷

『向譽上人行實(向譽關通行業記)』一卷

『向譽上人行狀聞書』十三卷

『向譽上人行狀法語聞書』一卷

『向譽上人行狀拔往生記聞書』一卷

『向譽上人行狀記』四卷

『關通上人略傳(關通老故尊師畧傳)』一卷

『關通上人傳』一卷

『關通上人行業記』三卷

『關通和尚行業記』三卷

『關通上人略年譜(關通上人傳年表)』一卷

第一卷から第四卷までは、関通著述典籍、第五卷は伝記が収録されている。

これまでの関通研究は、社会教化活動、捨世派の系譜、往生伝と往生論などテーマは多岐に渡っているが、その多くが『関通全集』を底本に用いて展開されている。全集の詳しい刊行部数は不明であるが、轉法輪寺が発行していた雑誌『関通』には六〇〇名を超える「雲介子関通全集讀者芳名」が記されており、少なくともそれより多くの部数が刊行されたと思われる。⁽³⁾『関通全集』初版本は多くの浄土宗寺院関係者や研究者らに支持され、完成から七十五年が経過した今日まで一度も顧みられることはなかった。

しかし、改めて『関通全集』を整理すると、刊行当初から残されている解決すべきいくつかの課題が浮き彫りとなった。本論文は、『関通全集』の刊行が開始されてから完成に至る過程で発生した問題点、あるいは、その後新たに浮上した疑問点のいくつかを指摘する。その上で、刊行以来、一度も行われなかった『関通全集』の再評価を試みる。

年号（西暦）	月 日	事 項
大正十四年（一九二五）	九月七日	浄土教報 全集刊行に関する広告
	九月十四日	浄土教報 全集刊行に関する記事
大正十五年（一九二六）	八月九日	浄土教報 全集延刊に関する記事
	十二月二十五日	関通全集第一巻発行
昭和二年（一九二七）	六月十日	関通全集第三巻発行
昭和四年（一九二九）	四月十四日	轉法輪寺 落慶法要
昭和六年（一九三一）	十二月十三日	浄土教報 全集続刊に関する記事
昭和八年（一九三三）	九月某日	刊行の実務を東京から京都へ移す
昭和九年（一九三四）	二月十日	関通全集第二巻発行
	四月十一日	全会員に関通全集を発送
		山下現有遷化
昭和十二年（一九三七）	一月二十日	関通全集第四巻発行
	四月五日	関通全集第五巻発行

【表Ⅰ】『関通全集』刊行年表

報』掲載記事で補いながら整理していく。また、大まかな略年譜を【表Ⅰ】にまとめているので、適宜参照していただきたい。

全集刊行の発端は、当時の浄土宗管長である山下現有（知恩院七九世、轉法輪寺十四世）が、自身が所持する関通の自筆本などを指して、「之れは是れ、尊師向譽關通上人の祖述するところ、篋中尚幾多の自筆本あるも、未だ世に行はれず、空しく蠹食に任かせんか、恐らく遠からずして湮滅せん、惜むべし悲しむべし、余既に頽齡九十、如何ともなす能はず、汝幸いに春秋に富む、他日之を上梓して以て正法を興隆せよ」と、弟子俊孝（轉法輪寺十八世）へ依頼したことにはじまる。両者が住職をつとめた轉法輪寺は、関通開基寺院の一つである。

俊孝は即時に全集編纂準備に取りかかろうとするが、時同じくして、轉法輪寺を北野から御室へ移築する計画が進行中であった。^④『関通全集』の刊行と轉法輪寺の移築、二つの重大事業を兼ねることに苦悩する俊孝であったが、坂戸彌一郎氏の、「關通上人全集の編纂こそ、誠に移轉新築の好箇の記念事業なり」との進言により、早期の完成を目指すして全集の刊行を決意する。

全集の編纂にあたり、監修を望月信亨、編集を阿川貫達、田中智肇らにそれぞれ依頼し、関通上人全集刊行会が東京の坂戸彌一郎の元に結成された。まず、刊行会は全集の底本とすべき資料を求めて、以下のような募集をかける。

『雲介子関通全集』刊行の経緯

まず、『関通全集』刊行の経緯について、編者田中俊孝によって詳しく記された全集第五巻「後序」より引用し、その背景を『浄土教

關通上人全集の刊行 徳川時代初期の宗門民衆布教家として知られた高徳關通上人の述作文書を網羅する全集の刊行が企てられてゐるが之につき此の全集を飾るべき底本の指示提供を江湖に求め

監修 文山下現有
編修 阿川貫達
阿川貫達 師

刊行發願主 田中俊孝 師

本書は大正十五年三月刊行の
底本を以て目下収録書に就て
底本蒐集中なれば提供を乞ふ

關通上人全集

刊行に就て

言ひお家藏
葉の願に書

幽獨たる元祿の文化は假世に悦樂し、信仰生活の眞實味を失ふとした。殊に淨土宗は徳川家の盛衰に、宗祖の眞面目を傳へんとし、彌陀菩薩の法門論議は、學究的にして民衆的であるべき。愚鈍の念佛は高僧に學んだ東に祐天、西山に義山、忍菴等の高僧に、念佛の門の民衆生活より遠ざかるべきを嘆き、忍菴は一高僧の別時念佛を發願し、東山の一派に密教の地を遺ひ、信仰生活の尊さを味ふ。時しも尾張の片田舎に、勇猛精進の相を現し、念佛生活を高揚せしめた、偉人が現れた、即ち關通上人である。身は雲介と稱し、關東の學寮、關西の祖廟に往復することし、時の幕府に獻言し、淨土律の嚴密を説き、彌陀一佛を本尊に他佛を拜せず、別時念佛口唱の一行を主張し余行を説へず、華美なる莊嚴を宗として質朴を尊とし、關通流と呼ばれる程の偉彩を現代に遺すの大改革を敢行した。宗祖の本意に歸る、單明念佛の尊き生活は、現代に於ける者の基としてやまざる所である。

茲に關通上人示寂の靈地、京都北野轉法輪寺が、紅藍の街を去り洛北御所の片境より、念佛の遺風を襲せんとする折柄住職中俊孝師は、師傳山下現有老師の意志を現實にすべく、關通上人全集刊行を企圖す。文樂博士雲月信亭師は此の舉を賛じ監修の任に當り、宗教大學教授にして宗學の研究に没頭する阿川貫達師は編輯を請せらる。願くは此の遺業に佛天の加護を祈り、完璧を期すべし。

藏書家各位に懇願す、御手元に關通上人に關する底本となるべき典籍を御所持の方は何卒御意を乞ふ。

九月三日まで底本確定を致し
度いのであります。至急御教示
下さるやうお願い致します。

東京市外 中野町
二四五〇 坂戸方

關通上人全集刊行會

てゐる。⁽⁵⁾

また、この記事の前号に掲載された広告が【図I】である。これによつて、全国の淨土宗寺院に対して全集刊行の旨が示され、愛知の圓成寺や貞壽寺、山口の西圓寺など、関通と所縁のある諸寺院の協力に依り、間もなく編纂内容と校訂本が決定する。

【図I】 右下の丸括弧内に「本書は大正十五年三月刊行の豫定にして目下收容書に就て底本蒐集中なれば提供を乞ふ」とあるように、当初、全集刊行は大正十五年三月の予定であつた。しかし、実際に第一巻が刊行されたのは大正十五年十二月と、およそ九ヶ月の遅延を余儀なくされている。これに関して、『淨土教報』には以下のような記事

【図I】『關通上人全集』刊行に就て
淨土教報一六三〇号

が掲載されている。

關通上人全集の延刊 望月博士の監修、阿川貫達師の編纂に成る關通上人全集は既に二月末を以て豫約を締切り三月を以て第一巻發行の豫定であつた爲めに豫約者はその配本を期待せるに拘らず未だ發刊されざる爲めにその刊行會の態度に就き日日問合さる者多き爲めにその眞相を知るべく刊行責任者を訪へば既に第一巻分約三百頁を組終り原稿の如きは第二巻分を完成せる由。然るに不幸にして印刷者たる三井精神堂が經濟上の都合上に依り經營を他に譲り種々の故障起りたる爲めに今次更に他の印刷所に注文した爲めに種々の事情に苦しめられ延刊のやむなきに至りたる由、然し今回印刷所變更の結果今後は進捗する様子なれば八九月末には是非一巻を刊行し次いで二卷三卷を出版することに決定したる由。⁽⁶⁾

これによれば、大正十五年八月には既に第一巻の体裁を整え、第二巻の原稿も完成しているが、經濟上の都合により印刷所の変更を余儀なくされたために刊行が遅延した。その後、印刷所變更に伴つて作業は進捗し、九月末には第一巻を、次いで第二巻、第三巻を出版するとある。しかし、実際は更に延期となり、それから四ヶ月後の同年十二月にようやく第一巻が、翌年六月に第三巻が刊行された。

第二巻より先に第三巻が刊行された理由は、編集上の困難にある。第二巻収録の『歸命本願鈔診註加俚語』は、証賢（一二六三〜一三四五）述『歸命本願鈔』の注釈書である湛澄（一六五一〜一七二二）述

『帰命本願鈔註』について、さらに関通が注釈を加えたものである。全集には総じて二十二部の関通典籍が収録されているが、その内、関通在世時に刊行された典籍は『燧囊』『圓光大師御遺訓一枚起請文梗概聞書』『本願念佛勸化本義』『後の世のつと』の四部のみである。そのほかの多くが、関通自身が注釈を施した諸典籍、法話の際に用いた原稿など、文章の体裁が整っていないものばかりであり、校正の度に改版を重ねたために編纂作業は大幅に遅延した。収集した底本が、編集するに難解な状態であることは全くの想定外であり、俊孝は「輕卒に完成を期したりしは、全く小弟の無經驗の致す處なりき」と述懐している。

一方、着実に進行していた轉法輪寺移築事業は、昭和四年四月に行われた落慶法要を以て落着することとなったが、他方、病衰する現有の看病に更なる時間を割かれるようになってしまふ。俊孝の負担を考慮した上で、編纂委員を変更し、刊行の実務を東京から京都へ移した。以下は、全集統刊の旨を告げる記事の全文である。

關通上人全集續刊決定 關通上人全集は一、三卷の二卷を發刊したのみで中正（止）されて居つたが今回山下猗下の絶大な後援により續刊と決定し、去る三日轉法輪寺に於て發刊打合せ會を開き種々協議されたが、決（結）局左記（下記）編纂委員によりて發行されることゝなつた。

郁芳隨潤、田中俊孝、植田秀法、吉水琢磨、伊藤現芳

それから三年後、第三卷の刊行から七年を経て、昭和九年（一九三四）二月に第二卷は刊行された。全集予約会員へは同年四月十一日に

發送された。しかし、この日、全集の完成を最も希望した現有が入寂となる。現有遷化の事實は、関通全集刊行会に重くのし掛かる。現役の浄土宗管長でもあった現有の入寂が世間に与えた衝撃は計り知れない。それから、およそ二年の歳月を夢裡に送り、現有の第三回の忌辰を迎えて、漸く第四卷の編纂を再開する。そして、昭和十二年一月に第四卷が、そして現有満三周の忌辰となる同年四月に第五卷が刊行された。

第四卷、第五卷が刊行された昭和十二年という年は、浄土宗にとって非常に重要な年であった。浄土宗二祖聖光房弁長の七〇〇回忌、三祖記主禅師良忠の六五〇回忌、知恩院二世勢観房源智の七〇〇回忌を一斉に執り行う三上人遠忌法要が全国で行われたのである。総本山である京都知恩院では、三月六日から十二日までの一週間に渡って法要が行われ、参詣者は五十万人以上にのぼった。⁽⁸⁾この三上人遠忌が全集完成を急ぐきっかけとなったことが、全集第五卷の凡例に詳しく記載されている。

顧れば、關通上人全集の編纂企てられ、俊孝畏兄より余に倚托せられしも、其間拾餘年、謄註加俚語は半に至らずして北條秀法師を煩はし、各種往生傳は校正照合をなさずして轉法輪寺に托す、皆諸師に勞をかけ自ら責を忘る。上人の傳記に就いては、諸所に索め恩師に尋ねしも、而も恒に意に滿たず。徒に編輯に迷ふて日を消し年を累ぬ。爲めに畏兄借本主に迷惑を及ぼせり。偶々舊冬、坂戸哲舟氏來訪、其傳記草稿を求めらる。氏は遠忌にあたりて全集完結を急がる。依りて、上京して、校正製本に當らる。既に數

拾日専ら之れ努め心血を注がる。今や、氏より其版成れりと。之れ偏に氏に負ふ所なり。

(中略) 時に昭和十二年三月二日

三上人遠忌大會を目睫にして安樂寺 随潤⁹⁾

文中傍線部より、全集の完成が三上人遠忌を意図する文言がうかがえ、三上人遠忌の記念事業とするために全集完成を急いだことは明白である。¹⁰⁾

既に述べてきたように、全集刊行の過程は決して順調とは言えなかった。印刷所の変更、編集作業の遅延、轉法輪寺の移築事業、現有の病衰と入寂など、様々な困難に阻まれ続けた。刊行開始から完成まで、およそ十二年という長い歳月をかけたが、刊行会は常に時間に迫られており『関通全集』はそのように切迫した状況での完成であった。

『雲介子関通全集』が抱える問題点

第五巻の刊行を以て、一応の完成となった『関通全集』を編者である俊孝は下記のように評価している。

而して同上人の祖述する處之れに足らず、尚此の收録以外に、燈囊鈔二卷、臨終用心一卷、寺院規則一卷、説法誡條一卷、勸孝章一卷、諸人往生記、隨聞往生記等三卷あり。又、先徳の書を國譯し以て刊行せらるゝものに、和字選擇集五卷、女人往生章、破戒往生章、和字名義集、三心要集、宗略大要義等各一卷あり。其の他、上人の法語類、消息文類等を檢出し、以て上梓せんか、恐らく全集一二巻千餘頁を補追するも足らざるべし、今は最初の豫定

に準じて、しばらく之等を割愛し、更に他日の熟縁に任かす。¹¹⁾

俊孝は、存在を認識しながら全集に収録されなかった典籍を挙げ、今回は叶わなかったがいずれ補訂されることも望んでいる。すなわち、編者自ら『関通全集』が未完であると認めているのである。

よって、ここからは俊孝の評価も踏まえた上で、資料研究が浮き彫りにした『関通全集』が抱える問題点を指摘していく。ここでいう資料研究とは、収録典籍の刊本、写本、活字本における文章の相互比較や、『佛書解説大辞典』や『國書総目録』、また関通の伝記に記される関通著述典籍のリストアップ、そして、CZNIやNDL-OPACを用いた資料の所在確認等を指す。

本来であれば、すべての収録典籍について行った分析と検証を記すべきであるが、紙面の都合により一々の典籍に関して詳細に解説することはできない。よって、本論では特に以下に挙げる三点を中心に言及したい。

一、未収録典籍の存在

二、底本の疑惑とテキストへの不信

三、非関通著述典籍の収録

第一については、俊孝の挙げた典籍のほかに、各目録や大学OPAC等で明らかとなった関通典籍について紹介する。第二については、全集第三巻収録『夢乃知識』を用いて、圓輪寺本(全集版)と圓成寺本(明治版)、二つの異なる関通真筆底本の存在とテキストの信頼性について言及する。第三については、全集第四巻収録『專念法語拔萃』を用いて、関通が著述や編集に一切関与していない典籍、非関通著述典

籍が収録されていることについて論じる。

一、未収録典籍の存在

未集録典籍については、まず編者俊孝が挙げた未収録典籍を改めて確認しておく。

- ①『燧囊鈔』二巻 ②『臨終用心』一巻 ③『寺院規則』一巻
- ④『説法誠條』一巻 ⑤『勸孝章』一巻
- ⑥『諸人往生記』三十二巻 ⑦『随聞往生記』三巻

上の七編は関通が著述した、あるいは関与した典籍である。

『臨終用心』は、同じく関通著述の『専修念仏同行講衆え掟書』『臨終用心追加』、さらに法岸著『臨終要語』とともに、『四要篇』として法洲によって刊行された。現在、文化十三年版、安政七年版、明治十七年版、明治二十四年版の現存が確認されている。また、明治四十三年刊『大日比三師講説集』巻中、及び、平成二十五年刊『孝養集／千代見草／四要篇』には活字版が収録されている。

『随聞往生記』は、天明五年版、安政四年版の刊本が現存しているほか、昭和五十四年刊『近世往生伝集成』二には、大橋俊雄校訂の活字版が収録されている。

そのほかの五部に関して、現存しているかは不明であるが、『勸孝章』に関して、

勸孝章へ此の一卷他筆にして圓輪寺の御所持の本中に有りしが紛失しぬ。¹²⁾

とあるように、以前は圓輪寺が写本を所持していたようである。

また、俊孝は上記七部とは別に、先徳の書を国訳して刊行した典籍として以下の六部を挙げている。

- ⑧『和字選択集』五巻 ⑨『女人往生章』一巻
- ⑩『破戒往生章』一巻 ⑪『念仏名義集』一巻
- ⑫『三心要集』一巻 ⑬『宗略大要義』一巻

これらは全て、関通以前の僧侶が著した典籍を、和字にて改刻したものである。関通著述典籍とは異なるが、いずれも民衆勸化を想定して改刻した典籍であり、関通教学に多大なる影響を与えたことは言うまでもない。

『和字選択集』は、法然著『選択本願念仏集』の改刻版で、現在でも広く流布している。民衆にも読めるように仮名を交えたことや、画僧として高名な忍海によって、十六章をわかりやすく解説する絵が施されたことも特徴的である。延享元年版、寛政十一年版、明治二十年版等が現存している。

『宗略大要義』は、法然著『浄土宗略抄』『往生要義抄』『念仏大意抄』の三編を合冊したものであり、宝暦十一年版、嘉永六年版等が現存している。

『女人往生章』『破戒往生章』は、別題をそれぞれ『本願念仏利益章』『本願念仏正義弁』といい、浄土宗西山派安養寺慈泉（一六四五～一七〇七）によって著された。『女人往生章』に関しては延享元年版と明治版の現存が確認されている。

『念仏名義集』『三心要集』は、浄土宗二祖弁長によって著された。広く流布したため現存資料も豊富で、『念仏名義集』は寛延四年版、

寛政四年版が、『三心要集』は寛延四年版、宝暦二年版、安永九年版、寛政四年版などが現存している。

以上は、俊孝が存在を把握しながら『関通全集』に収録されなかった典籍であるが、もう一点、上記のほかにも収録されなかった典籍がある。全集第四巻の凡例に「念佛講掟書に就いては、尾張圓輪寺藏本を以て底本となしたり」とあり、⑭『念佛講掟書』なる典籍の底本を明記しているのだが、本文掲載の事実はない。目次にも書題は示されておらず、収録予定であったことは確かだろうが、未収録となった原因については不明である。

次に、『佛書解説大辞典』に記載されている関通典籍の内、全集未収録かつ上記以外のものを以下に記す。

⑮ 『泉州岸和田妙祐往生聞書』 一卷

⑯ 『浄土宗円頓菩薩戒弁義』 一卷

『泉州岸和田妙祐往生聞書』は、『妙祐往生傳』と別称し、珂然（一六六九―一七四五）撰『新聞顕驗往生傳』に収録されていた。本書は、『妙祐往生傳』を伝え聞いた関通が弟子真海を岸和田へ使者として送り、持ち帰ってきた正本を書写して序を付したものである。文政六年版、明治二十七年版などが現存している。

『浄土宗円頓菩薩戒弁義』は、所在不明である。『佛書解説大辞典』には「大日本佛教全書續刊豫定書目」とあるが、現在する『大日本佛教全書』に『浄土宗円頓菩薩戒弁義』は収録されていない。

最後に、伝記に記されている関通著述について、道場清規、書簡、願文、和讃等の区別をせずに、記載のあったすべてを以下に挙げる。

ただし、ここに挙げる多くが内容未詳であり、書題のみ記すこととする。

- ⑰ 「念仏講衆掟書」 ⑱ 「在家念仏講の衆に示す書（同行掟書）」 ⑲ 「誠書」 ⑳ 「安心起行の法語（二紙法語、安心要語）」 ㉑ 「自画像の賛」 ㉒ 「往生記」 ㉓ 「貞壽寺衆尼共住規約（大慈悲勸戒利益章）」 ㉔ 「浄土宗安心起行起請誓言」 ㉕ 「貞壽寺衆尼殷懃規則五箇条」 ㉖ 「造寺戒文」 ㉗ 「機法二種真実和讃」 ㉘ 「説法規則」 ㉙ 「法則遺書」

以上、計二十九もの関通典籍が未収録であることを明かした。^⑲中には、伝記の本文中に引用文として掲載されているものもあるが、いずれも単行本としては一切収録されていない。

二、底本の疑惑とテキストの不信

第二に、底本の疑惑とテキストの不信について『夢乃知識』を例に検証していく。

全集第三巻に収録される『夢乃知識』三巻は、一頁が縦二十三字、横十五行の上下二段で、巻上六十四頁、巻中四十九頁、巻下六十四頁、計一七七頁から成る大著である。成立年代の特定は難しいが、最も古い記述は享保十一年（一七二六）、最も新しい記述は明和五年（一七六八）と、およそ四十年にわたって加筆を重ねた随筆である。

本書の内容は、名利を廃捨すること、「夢の世」である現世の儚さなど、関通が最も大事とした教学教理が、法然や無能といった先徳の典籍、および自詠他詠の和歌等を用いて説かれている。また、関通が

唯称念仏を堅固するきつかけとなった数種の夢感や、教化活動の軸である自利利他の勧めを自誓のために記した「一向専修發願文」「勸進稱名之願文」が収録されるなど、関通を知るに最も重要な史料の一つである。¹⁴

全集第三巻の凡例によれば、

夢乃知識に就いては、尾張圓輪寺所藏の眞筆本三巻を以て底本とし、大日比西圓寺所藏本三巻、及び尾張貞壽寺所藏本三巻を以て校勘せり。

とあり、これにより底本と校本が特定される。また、

但し底本中の巻に、自制戒策、客問安心編、及び修進記等を載するも、是等は何れも單行本として流布せるを以て、特に別巻に出す事となしたり。

と、第四巻に収録されている『自制戒策』『客問安心編』『修進記』の三編が、元々は『夢乃知識』巻中に収録されていたことを明かしている。

既述の通り、関通著述の多くは刊行に至らず、広く流布したものは少ない。『関通全集』に収録され、初めて活字となったものもある。しかし、『夢乃知識』の活字化は全集刊行時が初めてではなく、それ以前に二度、明治二十五年（一八九二）と明治三十七年（一九〇四）に浄土教報社から活字本が刊行されている。

明治二十五年版の体裁は、一丁が縦四十字、横三十行（左右各十五行）の一〇五丁、全一冊にて成る。刊行の背景について、当時の『浄土教報』掲載記事に以下のような記述がみられる。

原本は上中下三冊にて二百餘紙なれとも四號活字半紙本全一冊に仕立凡そ二百頁内外なり右の書（『夢乃知識』）は關通上人三昧發得の知解を以て佛願の妙旨を領納し心行を勸進せられしものにして平易適切素より尋常說教本の比にあらず說教の大家適ま寫得秘藏する人あれども多く見ざる所なり上人の遺蹟なる圓成轉法輪諸寺既に此書を逸して存せず圓成現董林辨我師幸なる哉上人親筆の原稿を得て此本書の泯滅せんことと利益の普ねからざるを憂ひ印刷して同志に頒たんことを謀らる本社之を賛成し其勞に服せんと欲す所望の君子ハ速に申込まるべし¹⁵

これによれば、浄土教報社が刊行の際に用いた『夢乃知識』の底本は、全集版と同じく上中下の三巻本、丁数は二〇〇丁程度、当時の圓成寺住職である林辨我が所有する関通の親筆原稿を用いた。

明治三十七年版についても、『浄土教報』掲載広告にその成立背景は求められる。

此書は去明治廿五年初版千部を印行し即時に品切れとなりたる俟今日に至れり、其間大方諸彦より本書を要求せらるゝもの夥しかりしも時機熟せざるものありしを以て再版の榮を得ざりき、然るに今や校訂を完了して、印刷に従事し十二月廿日を期して發行せんとす、蓋し本書は教家の必讀必携すべき布教上の良書なれば此際豫約法に依り至急申込ありたし¹⁶

これによれば、明治二十五年版は刊行された一〇〇〇部がすぐに品切れとなり、再版を希望する者が多かったため、十二年を経て三十七年版が刊行されたという。その際、体裁は明治二十五年版を踏襲する

も、誤字や脱字の訂正、句読点の加減などにより一丁が増訂されて一〇六丁となった。しかし、文章内容に触れる改訂は一切行われておらず、明治二十五年版編集時に用いた底本の外に、別の校本を参照したことは考えられない。

全集版と明治版、それぞれにおける資料の体裁と刊行背景については上の通りであるが、底本について一点の疑問が残る。全集版は、その凡例に見る限り「圓輪寺所藏の眞筆本三卷」を底本に据え、「大日比西圓寺所藏本三卷」「尾張貞壽寺所藏本三卷」を校本として編集された。一方、明治版は「圓成寺住職である林辨我が所有する関通の親筆原稿」を底本にして編集された。真筆と親筆、表記は異なるがどちらも関通自らが書いた筆跡であることを指しており、全集版と明治版とでは、圓輪寺本と圓成寺本、異なる二種類の眞筆本が使用されたことになる。西圓寺本と貞壽寺本は写本か眞筆本か記されていないが、少なくとも眞筆の『夢乃知識』は二部存在したようだ。

上記について、以下の三点が考えられよう。

- 一、圓輪寺本と圓成寺本が同一本である
- 二、どちらも眞筆本であるが、一方は流布させる目的で書かれた
- (三、どちらか一方(あるいは両方)は眞筆本ではなく写本である)

一について、明治二十五年の時点では圓成寺住職林辨我が所持していた眞筆本が、大正十五年全集編纂開始当時は圓輪寺に移っていたと考える場合に限り、両者は同一本であるといえる。二について、関通自身が護持するただに『夢乃知識』を二部以上著したとは考え難

く、眞筆本が二部以上存在するなら、二部目以降は世間に流布させる目的で書いたというのが妥当な判断であろう。また、三については原本の所在が不明である以上、文章内容から判断することは容易でないため、本論においては主として一と二の可能性について具体的に探っていきたい。

まず、全集版と明治版、それぞれの眞筆底本が同一本であるか否かを確かめる必要がある。また、両者の底本が異なる場合、どちらが関通護持の眞筆本であり、どちらが流布本であるか特定せねばならない。その方法として、全集版と明治版におけるそれぞれの文章内容を、語句や文の異同、追記、欠落等の点について比較する。その際、明治版は二十五年版と三十七年版の二編があるが、文章の内容自体に変更はないため、本論においてはより原本に年代の近い二十五年版を比較対象とする。また、全集版においては、第四巻に収録されている『自制誠策』『客問安心編』『修進記』の三編に関しても、元は『夢乃知識』収録の文章である事実を考慮し、比較対象に加えるものとする¹⁾。

結論から言えば、全集版と明治版の底本は同一でないと考えられる。根拠として、一つは漢字仮名表記の膨大な相違が挙げられる。全集版で『修進記』(全集四、八十九頁上一行)と記された書題が明治版で『修進説』(六十七丁右十一行)と記され、全集版で「然」(全集三、三六一頁上八行)と記された漢字が明治版で『爾』(七十九丁左一行)と記される等、表記の相違は甚だしい。

また、文章記載箇所の違いが挙げられる。特に顕著な箇所を示すと全集第三巻二二六頁下段十三行「已下臨終並に看病用心」から二四八

頁上段五行「已上臨終病中用心畢る」まで、法然や明遍などの言葉を引きながら、臨終時や看病時における用心が記されている。これを明治版に求めると、三丁右五行「ア、貴哉……」から八丁左三行「……永きねむりとなりもこそすれ」に相当する。両者を比較した際、内容的には一致する部分もあるが記述された文章の順序が大きく異なっている。当該箇所¹⁸の全集版の書き出しは「鎮西上人云く」「天台大師のいはく」「あゝ貴い哉」「つゝめども」であるのに対し、明治版の書き出しは「ア、貴哉」「つゝめども」「天台大師ノ云ク」「鎮西上人ノ云ク」と、全く入れ替わっている。

もう一つ、互いに記載がない文章の存在に関して言及したい。例えば、全集第三卷二四一頁上段八行目「明遍云く、臨終忽ちに近づく時……」とはじまる十行程の文章が明治版にはなく、反対に明治版十一丁右一行目「向師淨土要略抄上へ十七右 問信心具足ノ人ハ」とはじまる四行程の文章が全集版にはない。このように、互いに記載がない文章が両方に確認され、全集版にあつて明治版にない文章は二十六箇所、明治版にあつて全集版にない文章は三十箇所で見られる。その中には一頁以上にわたって記される長文も含まれている。

このように、根拠となり得る箇所をすべて指摘すれば枚挙に遑がないため、ここではいくつかを抜粋して例示した。もともと、全集版に至つては底本以外に二種類の校本も用いているため、原本のままの文章であるとは考え難いが、これだけ多くの異同が確認される以上、両者が異なる底本を用いたと断定できよう。

次に、どちらが関通護持の真筆本か。ここで、全集第五巻の伝記の

中から『夢乃知識』に関わる以下の文章を挙げる。

音（海音）私云はく、此好相（関通が唯称念仏を堅固するきつかけとなった数種の夢感）集録の夢の知識に記し、生涯封じて他見を不許。歿後に至つて開封して、こゝにのせ侍る。次下の願文も同く封ずと云へども、これは粗流行して弟子に授與せられしことあり。¹⁹

これは、関通に最も近い弟子の一人である海音が著した『向普上人行実』に記される一節である。この記述の続きには、「次下の願文」として「一向専修發願文」「勸進稱名之願文」が掲載されている。すなわち、海音が関した『夢乃知識』には、関通の数種の夢感、「一向専修發願文」「勸進稱名之願文」の記載があり、その上、関通はそれらを生涯封じて他見を許さなかった。

実は、関通の数種の夢感、「一向専修發願文」「勸進稱名之願文」は全集版にのみ収録された文章で、明治版には一切見られないことが今回の作業で明らかとなった。海音が『向普上人行実』を著したのは、巻末の「以上明和八卯九月十八日圓成海音記臆スル所ヲ書記ス」から判断すれば明和八年であり、これは関通没後わずか一年である。この間に、『夢乃知識』の写本が流出したことは考えがたく、海音が手に取つて関したのは、関通が護持し、他見を許すことのなかった『夢乃知識』であつたと推測される。従つて、記されるはずの文章が一切記されていない明治版底本の圓成寺本は、関通護持の真筆本ではないと判断できる。

以上より、全集版と明治版の底本は同一典籍ではなく、また、圓輪

寺本（全集版）の方が圓成寺本（明治版）より関通護持の真筆本に近いといえる。ただし、このことは圓輪寺本を真筆本と断定する確証には至らない。全集第三卷二九六頁上段には、

華嚴經に曰く、一念發起菩提心。菩提心熟成佛道。勝於造立百千塔。寶塔破壞成微塵。

と二行で記される短い一節がある。これを明治版に求めると、三十六丁左の九行目から三十七丁左の三行目まで、およそ二十五行にわたって先の一節に続く文章が記載されており、明らかに全集版が欠落していることがわかる。

このように、明治版の方が全集版よりも詳しい箇所も多々あり、全集版の信頼性は高くないといえる。また、全集刊行当初、明治版『夢乃知識』の存在を全集刊行会が認知していなかったとは考え難く、校本として明治版が用いられなかった点に関しては、今後の調査で明らかにしていきたい。

三、非関通著述の収録典籍 — 『専念法語拔萃』 —

第三に、関通の著述でない典籍が収録されている件に関して、『専念法語拔萃』を例に検証したい。

『専念法語拔萃』は全集第四卷に収録されている。全十六頁から成る短い文章は、多数の法語が雑多に載録された法語集である。これまでの関通研究にあつては、深貝慈孝氏が『専念法語拔萃』の一文を引き、以下のように評価している。

専修念仏こそ仏願に随順する行である。「彼の仏の願に乗ずる故

に、如来光明中に摂取して、捨させ給はざるが故なり。豈に貴きに非ずや、頼もしきに非ずや。誰々も皆貴きを克心得て、何の子細もなく、只一向に念仏すべし」²⁰は関通の立場を如実にものごとっている。浄土宗捨世派における理論と実践もこの一文につiskるので、関通こそ捨世派における第一級の人物ということが出来る。吉水正當専修念仏勧進沙門関通と自称するにふさわしい僧ということが出来る²¹。

全集収録の『専念法語拔萃』に序文や跋文はなく、関通が強く影響を受けた僧侶のひとりである無能の和歌を引用するなど、関通の典籍への関与をほのめかす箇所はあるものの、関通著述典籍の確定には至らない。全集第四卷『専念法語拔萃』の凡例には、

専念法語拔萃に就いては、明治癸巳版を以て底本となしたりとあり、底本として明治癸巳版、すなわち明治二十六年版を用いたことが明記されている。『専念法語拔萃』の各版は、いずれも『後の世のつと』の付録として収録されている。全集第四卷『後の世のつと』の凡例を見ると、

後の世のつとに就いては、明治癸巳版を以て底本となしたりと、『後の世のつと』に關しても明治二十六年版を底本としたことが記されており、これら二つの典籍は同一刊本を底本に用いて校訂されたと思われる。

『後の世のつと』は、享保十九年（一七三四）、檀信徒の要請に應えて著した関通にとつて初めての刊行物である。²³「つと」は「土産」と表記し、旅先などでその土地の産物を求め家族や友人などに配る品、

可^レシ。此ハ自^レ唱^テヘ難^クシテ。死スル者ノタメニヌナリ。唱^テヘラ^ル、者^ノ他^ノ念^ハ仏^ヲ頼^ミハス可^カラズ。自^レ申^テ。扱^テ他^ノ念^ハ仏^ヲモ聞^テ信^心増^進スルハ。弥^貴ナリ。自^レ他^ノ能^ハ々^ニ心得^ズテ。急^{ナル}片^ノ用^意ニ備^フ可^シ。

願^ハ以^テ此^ノ功德^ヲ平等^ニ施^ス一切^ノ同^レ發^ス菩^提心^ヲ往^ス生^ノ安^樂國
圓成^律寺^孝現^有 印^施

【図II】明治十八年版『後世之土産附録
專念法語拔萃』二十五丁左

可^レシ。此ハ自^レ唱^テヘ難^クシテ。死スル者ノタメニヌナリ。唱^テヘラ^ル、者^ノ他^ノ念^ハ仏^ヲ頼^ミハス可^カラズ。自^レ申^テ。扱^テ他^ノ念^ハ仏^ヲモ聞^テ信^心増^進スルハ。弥^貴ナリ。自^レ他^ノ能^ハ々^ニ心得^ズテ。急^{ナル}片^ノ用^意ニ備^フ可^シ。

願^ハ以^テ此^ノ功德^ヲ平等^ニ施^ス一切^ノ同^レ發^ス菩^提心^ヲ往^ス生^ノ安^樂國
印^施

【図III】明治二十六版『後世之土産附録
專念法語拔萃』二十五丁左

あるいは人を訪問する際に持参する手みやげ、そこから派生して用意すべきもの・準備すべきものを指す。すなわち、『後の世のつと』が意味するところは、後の世（極樂浄土）へ行く際の心構えや専修念仏勧進であり、これに關して民衆にとつてわかりやすい平易な言葉で述べられている。

『後の世のつと』『專念法語拔萃』の刊本には、次の二版がある。

一、明治十八年版『後世之土産／附録專念法語拔萃』

二、明治二十六年版『後世之土産／附録專念法語拔萃』

収録内容の差により丁数に若干の相違はあるが、全一卷、一丁二十行（左右各十行）と、体裁はほぼ同じである。

両者を比較した結果、大きく異なる点は「緒言」と二十五丁左の二点に見られる。

「緒言」について、多少語句の差し替えがあるものの、『後の世のつと』の由来、関通の略歴や刊行物について、緒言を記した現有自身の感想等、ほぼ同様の内容が記されている。明治十八年版「緒言」末尾は、

明治十八年初冬弥陀感應曰。不肖現有識於慈興山房（「現有」の印記）

とあり、文中の「慈興山」は愛知県圓成寺を指す。一方の明治二十六年版は、

明治癸巳春不肖現有識於獅子吼山房（「現有」の印記）

とあり、文中の「獅子吼山」は京都轉法輪寺を指す。どちらも「緒言」を記した時と場所が記されている。現有は、明治十二年十二月に

愛知県圓成寺、明治二十年五月に京都知恩寺、明治二十三年五月に京都轉法輪寺、明治二十六年七月に山口県西圓寺と寺院住持遍歴を追うことができ、明治十八年初冬は圓成寺に、明治二十六年春は轉法輪寺を住職していたことは確認できる。²⁵⁾

二十五丁左の比較を行う前に、そのほかの本文に関しては一字一句において差異は見られず、十八年版と二十六年版は同版のものと見て間違いないだろう。ただし、巻末二十五丁左の一文においてのみ、両者で大きく異なっている。【図Ⅱ】が明治十八年版、【図Ⅲ】が明治二十六年版の同一箇所である。明治十八年版は「圓成律寺孝現有 印施」と記されており、明治二十六年版は「圓成律寺孝現有」が削られ、ただ「印施」とのみ記されている。「印施」は多くの人々の利益となる事を印刷して配ることを表し、明治十八年版におけるこの一文は『專念法語拔萃』の著者（编者・印刷者）のサインに相当すると考えられ、これは『專念法語拔萃』の著者（编者・印刷者）が圓成律寺の現有であることを示している。

全集に収録される『後の世のつと』『專念法語拔萃』の底本は明治二十六版であることは既に述べた。言い換えれば『関通全集』の編者は「圓成律寺孝現有」の記されていない版を底本としたため、『專念法語拔萃』の著者（あるいは编者）が現有である事実を認識できず、『後の世のつと』の付録として収録されている『專念法語拔萃』を関通の著述として『関通全集』に収録したのではないか。「圓成律寺孝現有」が削られた理由として考えられることは、明治二十六年に現有が住職していたのは轉法輪寺であり、不必要となった「圓成律寺」を

削る際に「現有」も一緒に削ったのではなからうか。

次に『專念法語拔萃』の書題に注目したい。「拔萃」は「抜粹」と同義であり、書物などから必要な部分を抜き出すこと、あるいは抜き出したものを表す。すなわち『專念法語拔萃』とは『專念法語』なる文献から必要とされる文章を抜粋し、編集されたものであるといえる。従って、まず『專念法語』を明らかにする必要がある。

『佛書解説大辞典』によれば、『專念法語』なる文献は一部のみ掲載されている。書誌情報として、三巻本であること、隆円²⁶⁾の著作であること、天保五年（一八三四）の刊本があること、が確認された。この天保五年版の刊本は、現在、所在が不明であり、原本から確認することはできない。ただし、昭和五十一年に長谷川匡俊によって刊行された活字本が天保五年版を底本としており、内容比較にはこの昭和五十一年版を用いて検証を行う。²⁷⁾

本書によれば、『專念法語』の刊行は天保五年冬のことであり、隆円入寂の直前であった。『專念法語』に収録されている法語の数々は隆円自身が生涯にわたって書き蓄え、人々の求めに応じて書き与えたものや自らが感ずるままに記し留めたものである。箱の中いっぱいに積み重ね、未だ世に出ることのなかったこれらの法語を、隆円の弟子隆常（專念寺第十八世）が進言し、隆円指導のもと全三巻から成る『專念法語』が刊行された。収録された法語のうち、執筆当時の記載があるものを並べた際、上限は天明二年（一七八二）の檀林修学時、下限は文政十年（一八二七）と、少なくとも四十五年の長期にわたって書き留めた法語集であり、隆円の著述資料の中でもとりわけ貴重な資料

と言えよう。⁽²⁸⁾

昭和五十一年版の文章構成は、漢文表記の序文、幻阿天従の端書、弟子隆常の目録、本文（法語集）、雪堂敬阿ならびに遺弟某等の跋文、となっている。目録によれば、『専念法語』は上巻二十五条、中巻二十三條、下巻二十四條、計七十二條の項目から成る。全集版『専念法語拔萃』には本目録のような主題（「正雑差別」「一念起動」など）は付されていないため、文章を直接照らし合わせる。以下、昭和五十一年版の目録と文章照合結果を記す。

—上巻—

正雑差別	一念起動	循業堯現	内外不応	格外別風	死生無煩
任運契法	正邪二見	還愚指要	業遮念仏	宗祖遺跡	万機記別
单直大信	得宝開悟	包含万善	安心即声	聖淨難易	心土清淨
念仏得益	念死念仏	散心念仏	現是凡夫	念仏息妄	修行用心

自利真実

—中巻—

至誠真実	信機信法	回向堯願	貪瞋具足	神勅三心	度我報謝
仰頼救我	三代同調	声順本願	臨平一同	来迎迎接	仏果報力
順次得生	妄見悪相	唯心己心	若不生者	帰心有処	観称優劣
尊崇名号	捨身決定	名号闕支	鎮西述懷	自慶三業	

—下巻—

国豊民安	本願本体	無縁慈光	初学警策	説法制止	葬後垂誠
莫失当念	端心正念	順礼笠文	淨教内外	禪淨摂心	吉水御伝
宜遠慢心	授受十念	念仏発信	尋声往生	鎮西拔出	修道変境

凡僧来迎 死縁無量 生即無生 臨終要語 臨終回心 臨終急要
傍線を付した計二十六の項目で、『専念法語』と『専念法語拔萃』の文章は完全に一致し、その上、収録順序も重なった。これにより、『専念法語拔萃』は隆円の『専念法語』から二十六の項目を抜き出し、再編集した文献であることが明らかとなった。

関通は明和七年（一七七〇）に没しており、『専念法語』が刊行されたのは関通没後のことである。天保五年に刊行された『専念法語』を、関通が再編集することは物理的に不可能であり、『専念法語拔萃』の編集に関通が関与しなかったことは明らかである。もともと、隆円が関通の影響を受けて著した法語を『専念法語』にまとめた可能性は否定できないが、行状を整理する限りは両者に直接的な交渉はなかったと思われる、『専念法語』を著す際にも関通は関与していない。

おわりに

大正の終わりから昭和にかけて、十二年もの歳月をかけて『関通全集』は刊行された。多大なる時間と、人員と、資金とを割いて刊行された『関通全集』は、多くの支援者を獲得し、その後の関通研究を大きく飛躍させた。ただし、全集刊行背景の整理や、刊本、写本を用いた資料調査によって、刊行当初から抱えていたいくつかの問題点が浮き彫りとなった。

第一の未収録典籍に関しては、今回は文献から確認される限りの関通典籍を挙げたに過ぎず、書簡や法話原稿、願文や和讃等、膨大な量の未開資料が未だ世に点在しているだろうと思われる。事実、論者は

関通が記したとされている未発表の書簡を所持しているが、これについてはまず関通の書簡であるか否かを検証した上で、内容の分析に入らなければならないため、今後、詳しく調査していく。

第二の底本とテキストへの不信については、『夢乃知識』の一例を見ただけでも甚だしい誤字や脱字、文章の欠落、底本資料の見落とし等、信頼に足る資料であるとは言い難い。特に、全集刊行会も骨を折った『帰命本願鈔註加俚語』や、『燧囊』の解説書にして法話の原稿でもある『燧囊俚語』などは、『夢乃知識』以上の困難を抱えたであろう。資料をより正確に読み解くために、全集に収録されるすべての典籍について、現存する各版を比較しテキストの整合性を検証する必要がある。

第三に、関通の著述でない典籍が収録されている件について。『専念法語拔萃』は、関通没後に隆円が著した『専念法語』から法語を抜萃し、現有によつて再編集された典籍であり、関通は著述にも編集にも全く関与していないことがわかった。ただし、本論で明らかとしたのは『専念法語』や『専念法語拔萃』に関通が関与していないことであつて、隆円が関通の影響を受けて『専念法語』を著した可能性は否定できないため、今後、関通と隆円の影響関係に関して追求していくことは重要である。²⁹ また、ほかにも関通が著した確証がない典籍はあり、関通典籍のすべてを集めた『関通全集』として、非関通著述典籍と思われる資料に対する徹底した検証が求められよう。

『関通全集』が未だ多くの問題を抱えていることは既に述べてきたが、今回明らかにしたことは『関通全集』が抱える問題の一部に過ぎ

ない。全集第四巻収録『法の絵草紙』は、大橋俊雄氏によれば「関通に近い関係のあつた、その弟子によつて著述されたものではなかつたろうか」と関通の撰述であるとの伝承は否定している。³⁰ また、全集第一巻収録『燧囊俚語』巻四は、底本に文章の欠落があつたため全集編纂の過程で既に不十分であつたことが凡例に記されている。³¹ 以上、今後解決されるべき課題を提示し、再評価としたい。

〔注〕

（1）二重鉤括弧内の典籍名はすべて首題による。ただし、『自制誠策』『客問安心編』等、首題が誤っている場合は丸括弧内に正しい典籍名を記す。また、首題、目次、凡例等で表記が異なる場合も、同様に丸括弧内に別称を記す。

（2）関通の先行研究は、宮里泰司氏（一九五七）、伊藤真徹氏（一九五八、一九六四、一九七六）、大橋俊雄氏（一九六一、一九七八、一九八七）、田中祥雄氏（一九七二）、井川定慶氏（一九七二）、福原隆善氏（一九七六）、本田行憲氏（一九七七、一九七九）、深貝慈孝氏（一九七三、一九七八、一九八〇）、八木宣諦氏（一九八八）、長谷川匡俊氏（二〇〇二）等が挙げられる。この内、井川定慶氏が宝暦二年版『本願念佛勸化本義』と「関通不退妄教化（入信院文書）」を、大橋俊雄氏が『随聞往生記』版本を、八木宣諦氏が関通自筆の名号を用いたほかは、すべて『関通全集』収録典籍に依つて成された研究である。

（3）「雲介子関通全集讀者芳名」は、昭和十一年発行分の雑誌『關通』「七月號」「九月號」「十月號」「十一月號」にそれぞれ記載。

（4）北野から御室への移築事業の由来について、轉法輪寺は「関通上人の時代には京の西の果てであつた北野の地もその当時には既に町中にあり、轉法輪寺の阿弥陀様は西方におられるべきとの声のもと、更なる西方である御室へと移転することとなりました」（轉法輪寺ホ

ームページより抜粋」と明かしている。しかし、一方で一九二〇年代後半、京都市では都市計画としての土地区画整理事業が行われており、公共団体による強制力がはたらいた移築事業であった可能性も示唆される。この点に関しては現在調査中である。

- (5) 『浄土教報』一六三二号（大正十四年九月十四日発行）
- (6) 『浄土教報』一六七三号（大正十五年八月九日発行）
- (7) 『浄土教報』一九二七号（昭和六年十二月十三日発行）
- (8) 藤本了泰『浄土宗大年表』九〇八頁、昭和十二年三月六日の項
- (9) 『関通全集』第五卷凡例
- (10) 浄土宗において、祖師らの遠忌大会に併せて刊行物を出版することは珍しくない。多くの浄土宗典籍を収録する『浄土宗全書』も、法然七〇〇年遠忌記念事業という位置づけで出版された。詳しくは、石川達也『浄土宗全書』の刊行について（二〇〇九）参照。
- (11) 『関通全集』第五卷「後序」
- (12) 『関通全集』第五卷四一頁上段
- (13) 二十九の未収録典籍の内、①⑭は『関通全集』編者が認識していたもの、⑮⑯は筆者が新たに指摘するもの、⑰⑱は諸伝記より関通が著したとされる文献である。
- (14) 『関通全集』第三卷三三六頁上段（三四〇頁参照）
- (15) 『浄土教報』一〇七号（明治二十五年五月五日発行）
- (16) 『浄土教報』五六四号（明治三十六年十一月八日発行）
- (17) ただし、『自制誠策』の本文中に、「編者曰く、底本此に盡く、然るに一本は「行あたる此世は闇ぞ南無阿彌陀、ほとけまかせに夜を明すらん」の歌を以終てり、次下に左の如き記載あり、今参考のため、之を採録するもの也、」（『雲介子関通全集』第四卷六九頁下段）との断りを挟んだ後、およそ一四頁に渡る文章が収録されている。内容は、『夢乃知識』書題の由来、寺院道場や説法についての規則、関通の行業などが記されている。しかし、この文章は真筆底本以外のものであることが明記されているため、本論における比較対象からは除外するものとする。

(18) 『関通全集』第三卷二六頁下段十四行目から二三七頁下段二行目まで、および、明治二十五年版三丁右五行目から十四行目までの文章を比較した。長文につき、本論においては全文を挙げずに各文の書き出しのみを記し、両者の相違をより明確に示した。

- (19) 『関通全集』第五卷五頁上段
- (20) 『専念法語拔萃』（『関通全集』四、四八頁下）
- (21) 深貝慈孝「浄土宗捨世派における理論と実践―特に関通流を中心として―」（一九七九）
- (22) 「朝な夕な佛に向ふ度毎に今を限りと思ひはげませ」（『関通全集』四、五十三頁）
- (23) 『後の世のつと』について詳しい記述を以下に記す。「この書の趣起する所や、さきに鱗城下の中西氏（甚五兵衛）或年五月十五日、曾て上人を請して講演を聴聞する事有り。上人至りて老母の爲め、所々有信參會の道俗の爲めに、懇懃勸誡時をうつして夜の丑に至ると。その説たる無常の消息、安心決定勤行の規古今の妙説にして、聽徒感涙して稱名勇進す。時に中西氏座を立てて敬禮して申さく、今般の講説俗説の肝文、簡易にして悟り安し。願はくは上人、筆記して給はらは、梓に書して後代の法の橋とせんと、乞ふ事厚かりしかや。上人歡喜微笑し給ひ、それより染筆し給ふ。是上人眞筆の文章にして、誠に末世の人の爲めに残し給ふ、後世の土産なるへしと。圓成の海音和上、其砌瑞般と號して彼屋へ随伴し給ひし。上足の御物かたりを聞く事斯くのことし。」（『関通全集』五、四〇四頁上段）
- (24) 明治二十六年版には、『後の世のつと』『専念法語拔萃』のほかに『安心決定集』を収録した版もある。『安心決定集』は忍激（一六四五～一七一）によつて著され、性愚（生没年不明、一七世紀後半の浄土宗僧）が天和一年（一六八一）年に序文を施し刊行した。この版について、『安心決定集』が収録されている以外は、ほかの明治二十六年版と全く同一である。
- (25) 現行の行跡については、井川定慶『高僧山下現上人』（一九三四）、加藤鏡心『孝譽現有大僧正』（一九三四）などに詳しい。

- (26) 隆円(一七五九〜一八三四)は、宝暦九年、京都北野に誕生し、六歳で発心、九歳で江戸増上寺に掛錫して学問を修め、三十三歳で京都へ戻る。三十八歳で仏定の後任として洛東専念寺第十七世住職となった後は、『近世南紀念仏往生伝』『近世念仏往生伝』『近世淡海念仏往生伝』をはじめとする往生伝や『法岸和尚行業記』『学信和尚行状記』のような高僧伝、さらに『専念法語』などの法語類のほか、歌集『ちかひの松風』に至るまで多くの刊行物に携わっている。布教や教化活動にも厚く、上のような刊行物の大部分は巷の民衆を相手とする念仏勸化、延いては往生浄土へ誘うための方便にほかならなかった。隆円は官寺僧侶として世間的栄誉を求める心などは一切持たず、心底は常に捨世隠遁念仏へ向かっていた。隆円の事跡に関しては長谷川匡俊『専念法語』(一九七六)、同著者『近世念仏往生伝』と専念寺隆円(一九七八)を参照した。また、隆円の著作に関しては大橋俊雄「専念寺隆圓と『近世往生伝』」(一九八一)に詳しい。
- (27) 長谷川匡俊『専念法語 全』(専念寺、一九七六)
- (28) 『専念法語』の由来に関しては本文序跋のほか、長谷川匡俊『専念法語』(一九七六)収録「『専念法語』について」を参照した。
- (29) 隆円が編纂した『近世念仏往生伝』二編「述意餘説」中に、関通が語った内容が記載されていることもあり、両者に直接的な交渉は皆無であったとしても隆円が関通より何らかの影響を受けた可能性は現段階では否定できない。
- (30) 大橋俊雄『法の絵双紙』について(『近世往生伝集成』三、一九八〇、山川出版社)参照。
- (31) 『関通全集』第一巻凡例参照。

(すぎのはらとしあき 文学研究科仏教文化専攻博士後期課程)

(指導教員・松永 知海 教授)

二〇一三年九月三十日受理